

相川日出雄のライフヒストリー研究

—小学校社会科教師としての専門性形成に焦点を当てて—

白井 克尚

1. 問題の所在

1990年代以降、教育の現代的課題として、「教職の専門性」をめぐる論議が活発になってきている。しかし、これまでに社会科教師としての「専門性¹」の資質については、十分検討されてこなかったように思う。それは小山悦司が指摘するように、教師の「専門性」について論じる場合、「技術レベルでとらえられるものであって、人格性(例えば、教育観とか信念や使命感)に言及されることはまれ²」であり、また、社会科教師として固有に要求される知識・技術を、限定的に捉えることが困難であったためだと考えられる。そこで本稿では、次の二つの視点を設定し、社会科教師の「専門性」の問題について検討することとする。一つは、社会科固有の領域である「社会科学研究³」との関連における「専門性」の解明である。二つ目は、戦後社会科教育実践史における代表的な教師の「ライフヒストリー⁴」を事例として取り上げ、「専門性」の形成過程を追うことである。

以上の研究視点より、本稿では戦後社会科教師を代表する相川日出雄(1917-1991)の「ライフヒストリー」を取り上げ、小学校社会科教師としての「専門性」の形成過程に迫ることとする。周知のように、相川は、千葉県印旛郡富里小学校久能分校において1952年度(一部1953年度)の小学4年生を対象に『新しい地歴教育』⁵の実践に取り組み、

¹ 森分孝治は、社会科教師の専門性としての固有の資質を、「より質の高い社会科の授業をつくる力」としての「社会科授業構成能力」について言及している。しかし、「客観的に確定できるところから始め、確定できる領域をしだいに広めていこう」と主張するにとどまっている。(森分孝治「社会科教師の資質と専門性」教員養成大学・学部教官研究集会社会科教育部会編『社会科教育の理論と実践』東洋館出版社、1988年、50-51頁)。

² 小山悦司「教師の力量概念」岸本幸次郎・久高喜行編著『教師の力量』ぎょうせい、1986年、34頁。

³ 坂井俊樹は、小学校社会科教師の「専門性」育成に関わり、「教師自身が、社会科を支える地理学研究や歴史学研究、国際政治・経済学、社会学といったさまざまな関連諸学問に関心をもち、関連書・概説書などに触れる機会を多くすること」が、優れた授業としての「深み」をもたせることにつながることを述べている(坂井俊樹「社会科教育の新たな発展と教師の専門性」東京学芸大学社会科教育学研究室編『小学校社会科教師の専門性育成 改訂版』教育出版、2006年、10頁)。

⁴ 本稿における「ライフヒストリー」は、アイヴァー・F・グッドソンによる「ライフヒストリーは教師や教育の問題を解決するための『方法』」である。しかもそれは従来の量的分析や学校の社会学の成果と対立するものではない。むしろ、そうした多研究手法も取り込みながら相対的に教師のリアリティを追求するもの(アイヴァー・F・グッドソン著、藤井泰・山田浩之編訳『教師のライフヒストリー』晃洋書房、2001年、199頁)とする概念を基盤としている。

⁵ 相川日出雄『新しい地歴教育』国土社、1954年。

戦後社会科教育実践史を代表する教育実践家として認知されている。この『新しい地歴教育』の実践の先駆的意義に関しては、これまでの先行研究⁶⁾においても数多く論及されてきた。しかし、相川の小学校社会科教師としての「ライフヒストリー」に着目した場合、相川が、なぜそのような優れた教育実践を生み出すことができたのかといった社会科教師の「専門性」に関わる問題については、これまでの先行研究において明示されてこなかった。そこで本稿では、相川の「ライフヒストリー」の事例をもとにして、小学校社会科教師としての「専門性」形成の問題について分析的に考察を深めることとする。

2. 本研究の方法

(1) 分析視点

本稿で、分析手法として用いる「ライフヒストリー研究⁷⁾」は、教師教育研究の領域において進展がめざましい研究手法である。この「ライフヒストリー研究」の手法について山崎準二は、「実践者としての教師の華麗や教職歴、あるいは実践が行われた学校状況や時代的背景などの推移に伴って変容（発展や深化、あるいは停滞や転換など）していくライフヒストリー全体の中に位置づけ、捉えることによって初めて、その実践に込められた実践者の願いや意図、用いられた教育内容・方法・形態に込められた実践者の願いや意図、さらにはそれらの背後にある教員文化の特性などが見えてくる⁸⁾」と述べている。すなわち、「ライフヒストリー研究」は、小学校社会科教師としての「専門性」形成の問題についても、「転機⁹⁾」となった経験を分析的に解明することにより、その過程を

⁶⁾ 『新しい地歴教育』実践について言及している先行研究は多いが、相川が『新しい地歴教育』実践を生み出した背景について触れている先行研究は、以下のものがある。桑原正雄「『新しい地歴教育』の教育実践について」国民教育編集委員会編『教育実践論』誠心書房、1958年。遠藤藤吉「『新しい地歴教育』解説」宮原誠一・国分一太郎編『教育実践記録選集』第3巻、新評論、1966。日比裕「フィールド・ワークと文集による郷土史学習—相川日出雄小4『野馬のすんでいたころ』(昭27) —」『教育科学社会科教育』No. 152、1976年。小原友行「小学校における歴史授業構成について—相川日出雄『新しい地歴教育』の場合—」広島史学研究会『史学研究』第137号、1977年。田中史郎「相川日出雄『新しい地歴教育』における方法と内容—現代歴史教育理論史研究—」『岡山大学教育学部研究集録』第55号、1980年。白井嘉一「子どもの問題意識を育てる郷土の歴史教育—1950年代の相川日出雄実践—」『戦後歴史教育と社会科』岩崎書店、1982年。小島晃「郷土に根ざす系統的な歴史学習—1954年・相川日出雄『地域の歴史』(4年生)の授業—」民教連社会科研究委員会『社会科教育実践の歴史—記録と分析・小学校編』あゆみ出版、1983年。森脇健夫「子どもの問題意識と系統的歴史学習」『あたらしい歴史教育 第6巻』大月書店、1994年。拙稿「相川日出雄の郷土教育実践を支えた考古学研究—『考古学と郷土教育』を手がかりに—」『社会科教育研究』No. 115、2012年。

⁷⁾ 「ライフヒストリー研究」では、実践者本人からの質問紙調査やインタビュー記録を活用することが研究方法としてあるが、現在において相川にそうした調査を実施することが不可能である。したがって本稿では、「相川日出雄のライフヒストリー」について、本人が残した論考の分析を基盤として、関係者の方々への聞き取りを補完的に行うことにより、描出を試みた。

⁸⁾ 山崎準二「研究の目的・方法・対象」久富善之編『教員文化の日本の特性—歴史、実践、実態の探求を通じてその変化と今日的課題をさぐる—』多賀出版、2003年、266-268頁。

⁹⁾ ここでいう「転機」という概念については、「教職について以降の経験上で生まれる、教材観や子ども観、あるいはそれらを含めたトータルな意味での教育観に関するなんらかの変化や転機」(山崎準二

明らかにすることが可能になると考える。そこで本稿では、相川の実践記録や著作、雑誌論文をもとに、相川が独自に行っていた「社会科学的研究」に着目し、小学校社会科教師としての「専門性」形成と変容の「転機」となった経験について検討することとした。そのことは、相川の事例をもとにして、小学校社会科教師の生涯発達に関して、一つ的话题を提供する試みであるといえる。

(2) 相川実践の時期区分

本稿では、まず相川の「ライフヒストリー」を、小学校社会科教師としての教育観や授業実践の違いに着目して、次のように時期区分を行った。

第一期「出生から敗戦まで」(1917～1945年)

相川の社会科教師としての意識の芽生えをその生い立ちに求めることができる。

第二期「経験主義から郷土教育重視へ」(1946～1950)

相川が、富里小学校久能分校において郷土教育に着目するまでの時期である。相川の社会科授業観や授業実践の基盤もこの頃に形成された。

第三期「郷土史研究から郷土史教育へ」(1951～1953年)

相川によって、『新しい地歴教育』実践が展開された時期である。相川による郷土史研究が社会科の授業観や授業実践の形成に大きな影響を与えていた。

第四期「多様な教育実践の追求」(1954～1958年)

相川の場合、富里小学校本校勤務、肺結核による休職、山梨向井遺跡と山梨向井前広貝塚の発見などの出来事が、社会科授業観や授業実践に変容をもたらしていた。また、文学教育に重点を置いた教師としての歩みが見られた。

第五期「社会科教師、郷土史家として」(1959～1975年)

相川が、小学校社会科教師と並行しながら、積極的に埋蔵文化財の調査研究を行っていた時期である。

本稿では、相川の「ライフヒストリー」の第一～五期を対象とし、小学校社会科教師としての「専門性」の形成と変容過程についての分析的考察を行う。

表 1. 相川日出雄のライフヒストリー・年譜

年	年齢	相川日出雄の生活経験	相川日出雄の教育経験	相川日出雄の調査研究経験
			【第 一 期】	
1917	0	6月23日 東京府豊玉郡角筈(新宿区)にて生まれる		
1923	6	4月 世田谷笹塚小学校入学		
1929	12	4月 滝野小学校(北区)を経て私立京北実業学校入学		

『教師のライフコース研究』創風社、18-19頁)として用いる。

1939	22	3月 応召、千葉陸軍病院衛生へ勤務		
1942	25	6月 結核に感染し除隊		
1943	26	4月 千葉県安房郡長尾村根元国民学校に助教として赴任		
1944	27			
1945	28		【第二期】	
1946	29	4月 千葉県印旛郡富里村立富里国民学校久能分校に赴任	④	
1947	30	6月 日教組結成大会に参加	④	
1948	31	7月 千葉県の執行委員から現場に帰る	④社会科への着目	
1949	32	4月 地域において考古学的遺物を採集する	④「家賃しければ」の実践	考古学的遺物収集開始
1950	33	4月 農村教育に取り組む	④「石橋式」の実践 【第三期】	
1951	34	8月 自作スライド、ワークブック作成 10月「家賃しければ」発表	④「私たちの村の歴史」の実践	自作スライド「私たちの村の歴史」制作、ワークブック「私たちの村」編集作成
1952	35	4月「私の歩んだ歴史教育への道」発表 7月「教師ができる実態調査」発表 10月歴教協大会「農村生活と歴史教育」発表	④「新しい地歴教育」の実践	「新しい地歴教育」のための郷土史研究
1953	36	1月「歴史教育と人格形成」発表 2月郷土教育全国研究大会発表 10月「社会科と郷土教育」発表	④「新しい地歴教育」の実践(一部) 【第四期】	
1954	37	4月 富里村立富里小学校に赴任 7月『新しい地歴教育』発刊	⑥「国語教師の仕事」の実践	
1955	38	4月肺結核で休職する(～1957年11月) 6月「国語教師の仕事」発表	休職	
1956	39	5月「考古学と郷土教育」発表	休職	
1957	40	2月『やづの子ども』発刊 4月 四街道町立旭小学校に赴任	休職 ⑤ 【第五期】	
1958	41		⑥遺跡調査の実践	2月 山梨向井遺跡発見 4月 山梨向井前広貝塚発見
1959	42			
1960	43	6月戦後教員物語「やづの子ども」発表		
1961	44	4月 四街道町立四街道小学校に赴任 「印旛沼手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査」発表		4月 四街道町及び周辺地域石器時代遺跡調査(～7月) 12月 山梨向井前広貝塚調査(～1962年1月)
1962	45	3月「古文書と歴史教育」発表 「四街道内遺跡地図」発表		1月 山梨向井前広貝塚調査

1963	46			和良比貝塚調査
1964	47			11月 和良比向井貝塚調査
1965	48			
1966	49			
1967	50			
1968	51			
1969	52			
1970	53			4月 亀崎米山遺跡調査（～6月）
1971	54			1月 四街道町中世城砦跡調査（～3月）
1972	55		千葉県歴史教育者協議会副会長	
1973	56		千葉県歴史教育者協議会副会長	
1974	57	1月 『新しい地歴教育』の背景』発表 3月 『四街道の文化財』第1号に寄稿	千葉県歴史教育者協議会副会長	6月 物井千代田団地内貝塚調査
1975	58	3月 四街道小学校を退職 7月 『房総の民衆の歴史と現実』に寄稿	以後 千葉県郷土史研究連絡協議会理事等を歴任	以後 四街道市文化財審議会副会長、四街道市史編纂主任等を歴任
1976	59	3月 『四街道の文化財』第3号に寄稿		
1977	60	10月 『町政だより』に「地区探訪」を第136号（～1991年8月）まで連載		
1978	61			
1979	62			
1980	63			
1981	64	7月 『富里村史 通史編』に寄稿		2月 長岡入ノ台（ボッカ山）遺跡調査
1982	65			
1983	66	3月 『地区探訪』発刊		
1984	67	3月 『四街道の文化財』第10号に寄稿		
1985	68	3月 『四街道の文化財』第11号に寄稿		
1986	69	3月 『四街道の文化財』第11号に寄稿		
1987	70	3月 『四街道の文化財』第12号に寄稿		
1988	71	3月 『四街道の文化財』第13号に寄稿		
1989	72			
1990	73	3月 『四街道の文化財』第15号に寄稿 5月 『四街道市史 近世編 資料集』を編集		
1991	74	逝去（享年74歳）		

注1 四街道市文化財審議会篇『四街道の文化財—故 相川日出雄氏 追悼号』No. 19（四街道市教育委員会、1993年）、四街道市史編さん室・川端弘士氏への聞き取り、「相川日出雄埋蔵文化財調査

ノート」（四街道市史編さん室所蔵）などに基づき作成した。
注2 丸数字は担任学年。

3. 第一期 生誕から敗戦まで（1917-1945年）

(1) 生い立ちから教師になるまで

まず、戦後社会科教育実践史を代表する相川日出雄とは、どのような生い立ちをもった人物であったのか。相川は1951年10月における論考において、「自画像」として自己の来歴を語っている。

大正6（1917）年6月23日、東京都新宿に生まれました。当時、祖父は巡查、父は役場吏員。妹三人弟一人。12歳の時母に死別、その後事情があつて祖父母に育てられたが、母に死なれたわびしい気持は今も忘れることはできません。父の希望で京北実業に入れられたが、ソロバンと簿記棒が大きらいでした。小、中学生のころは一日机にかじりついて、読書したり、考古学だとか昆虫採集などひとりこつこつとはじめるトコトンまでやらないと気がすまなかつたので、変わり者あつかいにされました。この性質は今に続いています。¹⁰

母との死別、不本意な京浜実業学校への入学、思い通りにいかなかった生い立ちに彼の「科学」への関心の萌芽を見ることができる。遠藤豊吉は、「暗さと不安定さを加えてくる時流とその流れのなかでいやというほど人の心の冷たさ、醜さ、暗さ、不安定さをみつづけた氏は、科学と考古学の世界に、確かなもの、正しいもの、動かないもの、美しいものを求めていたのではなからうか¹¹」と述べている。おそらく彼の学歴や生い立ちから来るコンプレックスが、後のライフヒストリーにおける一貫した研究的姿勢として引き続がれていたのではないだろうか。郷土史教育実践における「科学」的な専門的な研究的態度は、相川の生い立ちにその源流を求められる。

そして、相川は第二次世界大戦中の1939年3月に応召を受けて結核病棟に勤務する。しかし、勤務中に突然咯血したために1942年6月に除隊となり、祖父母の郷里である千葉県印旛郡富里村に帰る。ただボンヤリしていても仕方がなからう、という人の勧めで教師の道を選び、1943年4月より千葉県安房郡根本村国民学校において、教師生活をスタートさせる¹²。そこでの教員生活について相川は、次のように語る。

5年間の召集生活を終え、昔は考えもしなかつた教師になつたのが、昭和18（1943）年4月ですから現在9年目です。地道な農村教育に心身を打ち込んでいますが、一生

¹⁰ 相川日出雄「家貧しければ」後藤彦十郎編『魂あいふれて—二十四人の教師の記録—』百合出版、1951年10月、205頁。

¹¹ 前掲、遠藤『『新しい地歴教育』解説』、321頁。

¹² 同前、318頁。

涯の仕事となるでしょう。¹³

このように、相川は戦後教師としての拠り所を、まずは「農村教育¹⁴」に求めていく。そうした相川の姿勢を決定づけていたものは、戦時中の自身の教師生活であったことは明らかである。

(2) 自己の戦争責任の追及

最初に勤めたのは房総半島最南端の小さな小学校で、艦砲射撃や食糧せめて親子身のちぢむ思いでした。終戦翌年三年目で教師のもっとも怖れる（もっとも憎むべき）不意転任をくらい現在の学校に勤務。ここではもう6年目ですが、私の望みは宮澤賢治になりたいということです。ガリ版印刷を頼みに来る農民や、幻燈を部落でやる時「そっで、先生さんよう」と話しかける村人たちと仲間になりたいのです。¹⁵

このように、相川は「親子身のちぢむ思い」をしながら戦時中の教師生活を送る。しかし、終戦翌年三年目において、千葉県印旛郡富里小学校久能分校に転勤となる。ここでの教師経験を通じて、相川にとっての小学校教師の仕事が「一生涯の仕事」として位置づけられる。すなわち、相川は戦後において転向を経験した教師であった。

このような相川の転向の姿について遠藤豊吉は、「敗戦直後、氏は、戦争中の二年余りを平凡な教師として送ったという事実に、鋭い批判の錐をもみこむ。そして、平凡な国民というよそおいをまとおくった生活が、結果として戦争協力に深くつながっていたことへの責任を、みずからの内部に発掘するのである¹⁶」と指摘する。つまり、戦時中の二年余りの「平凡な」教師生活が、自己の戦争責任の追及に結びついていたと指摘するのである。相川の「宮澤賢治になりたい」という思いの吐露は、そうした事実を表していると思われる。また、相川による自己の戦争責任の追及の姿は、『新しい地歴教育』の中の「もう二度と戦争協力はしまい¹⁷」といったことばにおいても確認できる。

では、相川における戦争責任の追及は、具体的にどのような行動として実践されたのか。相川の場合、それは社会科の授業実践を通して行われていくこととなる。

4. 第二期 経験主義から郷土教育重視へ(1946-1950年)

(1) 社会科への着目

1947年、相川は千葉県富里村立富里小学校久能分校の4年生を担当していた。当時の相川は、千葉県の教員組合の執行委員を務めていたのだが、当時の政治状況に翻弄され、

¹³ 前掲、相川「家貧しければ」、206頁。括弧内は引用者による。以下、引用文中においては同じ。

¹⁴ 相川日出雄「地力等級と取り組む キン青年奮闘記」『農村文化』No52、1951年4月、52-55頁。

¹⁵ 前掲、相川「家貧しければ」、197頁。

¹⁶ 前掲、遠藤「『新しい地歴教育』解説」、318頁。

¹⁷ 前掲、相川『新しい地歴教育』、15頁。

教育現場に帰る決意をする。そのことについて、相川は次のような回顧をしている。

最初、コース・オブ・スターディのことばに目をパチクリし、文部省の指導要領は申すにおよばず、社会科関係の教育書をよみあさって、さてと心おどらし胸をときめかして社会科を始めたのである。カリキュラム、シーケンス、スコープ、ガイダンス…頭を悩ましたコトバは数えきれない程であった。¹⁸

このように政治や教育状況に翻弄されながらも、社会科の教育実践に前向きに取り組んでいこうとする相川の姿がわかる。そして、実際に取り組んでみた社会科は、次のような学習成果を教え子たちにもたらしていた。

こんな時代(1947年)に私は社会科を始め、その第一回の生徒がいま(1953年)中学三年になっているのである(括弧内は筆者)。そして彼らは小学校6年まで社会科を学習して4年で足ぶみをしている。

ではなぜ4年で学習した社会科が身につけているのかというと、それは子どもたち自身が行動したからだとは私は考えている。「5、6年は社会科の時間によく草取りをやらされたっけ」という生徒もあれば、「おら方じゃ社会科の本ばっかり読んでいたや」という生徒も現在いる。

もちろん4年は不完全ではあったが、農業面では過程の農具を調べ、作物の種類を調べて歩き、グラフをつくり、討論をしたのである。そのような行動が良かれ悪しかれ教科書中心の社会科よりは少なくとも彼らの身につけていたのだった。¹⁹

つまり、この頃の相川は、子どもたち自身が行動することによって学ぶという「経験主義」の社会科授業を行っていたのである。

(2) コア・カリキュラム批判と郷土教育への接近

この頃、相川が取り組んでいた社会科実践の様子について、古川原と勝田守一が次のように聞き取りを行っている。

あなたは、石橋勝治氏の社会科に学んで、物価のしらべをしたり、稲の種類をしらべたり成果を見せてくださいました。そうして、子どもたちは結論として、農村をよくしていくために、農業に機械をいれ、作物の種類を改良しなければならないということに気がつくことも見せてくださいました。またいわゆる農村好景気の時代でも、物価がどんなに農民の犠牲でまわっているかということも子どもたちが気がついているといわれました。(中略)ところで、その石橋式という社会科はあなたがごらんになって、獲得される知識はバラバラであり、恐ろしく長い時間をかけねばならず、わあ

¹⁸ 相川日出雄「社会科と郷土教育」宮原誠一編『日本の社会科』国土社、1953年、247頁。

¹⁹ 同前、同頁。

わあいうばかりで子どもの生活にしみ込まない、という結果になりました。²⁰

ここからは、1950年頃まで相川が、石橋勝治の社会科に影響を受け、作業単位による「経験主義」の社会科授業に取り組んでいたことがわかる。しかし、子どもたちは現実の問題にすでに気がついており、こうした現実の問題解決に直接寄与しない社会科授業に次第に疑問を感じてくことになった。

そこで相川は、千葉大学の城丸章夫との共同労作でコア・カリキュラム批判（『あかるい教育』No. 21、1950年3月）を行い、矢川徳光のソヴィエト教育学の本格的な愛読者となったという²¹。相川における社会科実践の自己批判の要点は、「プロジェクト法²²」の社会科が、現実の問題解決に寄与していないといったところにあった。こうした自身の経験主義の社会科授業への自己批判が、「郷土教育」への接近をもたらすことになる。後に相川は、次のような印象的なことばで「郷土教育」について表現している。

私は地理、歴史以前に以上のような郷土の教育が社会科のなかで行われるべきだと考えている。しかしそれはあくまで正しい地理、歴史の土台としてであって、逆コースの万国に冠たる地理や、一応表面は国民の希望に応ずるような形をとった、なしくずしの改造社会科には郷土教育は無縁なものである。

なぜなら以上に書いた郷土教育は民族のための郷土教育であるからだ。（中略）

その力への奉仕者として教師は教える機械となり、教科書や処方箋の雑誌にかじりつく道をとらずに、魂の技師として、子どもたちの住む郷土の生き生きとした具体的な事物による社会科を私はおしすすめたいと願っている。

これは私の魂の叫びでもありまた、私が現場師として終戦以来たどりついたところの民族の未来の世代を幸福にする社会科の道でもあるのだ。²³

このように、相川は「民族の世代を幸福にする社会科の道」として、「郷土の生き生きとした具体的な事物による社会科」へとたどり着く。すなわち、敗戦以降の相川における戦争責任への追及が、この時期の「郷土教育」へとつながっていったといえる。

4. 第三期 郷土史研究から郷土史教育へ（1951-1953年）

(1) 教師による郷土の科学的研究

相川は1951年度の授業実践を通じて、「私の歩んだ歴史教育の道」（『歴史評論』1952年4月号）という実践記録を発表する。この論考を通して相川は、教師による社会科教材の樹種編成を主張していくことになる。そのきっかけとなったのは、次のような教育

²⁰ 古川原「子どもを全面的に—相川先生の歴史教育を見る—」『教育』No. 15、1953年1月、22頁。

²¹ 前掲、古川「子どもを全面的に—相川先生の歴史教育を見る—」、22頁。

²² 同前、同頁。

²³ 前掲、相川「社会科と郷土教育」、247頁。

実践上の経験からだという。

私のいる学校は、成田町から2キロばかりの4年までの分校で、私はそこで4年を受持ってもう6年になります。4年前に社会科で原始時代を学習して縄文土器のことを子供に話したところ、子供は競争で土器の破片を私のところに持って来ました。それから気がついたのですが、畑に必ず土器の破片があるのです。土器ばかりでなく時には石斧や石鏃さえ子供たちはみつけました。それから私も興味を覚えて、とくに珍らしいものを持って来た子どもには、ノートや鉛筆をくれたものです。私もつとめて村の畑や山を家庭訪問の度毎に歩くようにしました。²⁴

ここからわかることは、相川が1947年頃より考古学的遺物の分布調査を行っていたということである。相川にとって社会科の教材を求めて地域を歩いた経験が、郷土に目を向けさせ、郷土史の科学研究を行わせるきっかけとなっていたのである。そして、1952年の夏、相川は自作スライド教材の作成を企画する。村人に対して、考古学的遺物への啓発を意図した社会教育用の教材であった。

こうして三年間にわたって子どもらと学習しながらコツコツ集め、部落のなかを歩いたおかげで、遺物も相当数集まり、私の知識もある程度充実してきた昭和26年、6回目の4年生を受持った時、これらの成果を幻燈化したらという気になりました。この契機は今井誉次郎さんが西多摩でやっている自作スライドでした。直接、今井さんの学校へはまだ行って見ませんが、波多野完治氏編、今井氏その他数氏著の「幻燈」(金子書房)を読んで、「これなら私にもできそうだ」、と思ったからなのです。²⁵

このような独自の活動が、相川をして、郷土の科学研究に向かわせることになる。当時、今井誉次郎のいた東京都西多摩小学校は、社会科の研究指定を受けてワークブック『伸びゆく村：社会科物語』（西多摩小学校、1949年）を編集、作成していた。相川もこれに学び、独自の社会科ワークブック『私たちの村』の作成に取りかかることになる。その際に必要となった社会科学のスキルが、郷土史研究の方法であった。こうした教師による郷土史研究は、1950年代前半において隆盛していた「国民的歴史学」運動にその着想を見ることができ。運動の理論的指導者であった石母田正は、1948年に「村の工場・工場の歴史」を発表し、「教科書を教師自身がつくること、歴史を与えるものではなくみずから書く²⁶」べきだという主張を行った。当時の「国民的歴史学」運動は、相川のような全国各地の教師たちの郷土史の科学研究を推進していたのである。

²⁴ 相川日出雄「私の歩んだ歴史教育への道」『歴史評論』No. 35、1952年4月、40頁。

²⁵ 同前、同頁。

²⁶ 石母田正「村の歴史・工場の歴史」『歴史と民族の発見』岩波書店、1948年、280頁。

(2) 武蔵野児童文化研究会への参加

相川は、ワークブック『私たちの村』の作成に影響を与えた要因として、武蔵野児童文化研究会が作成した『わたしたちの武蔵野研究、向ヶ丘編』を手に入れたことをあげている。

ちょうどその頃、武蔵野児童文化研究会の「わたしたちの武蔵野研究、向ヶ丘編」を手に入れたことは、大変私に幸いました。それは、このワークブックを見て私の考えていることが、ぴったりこれによって示されていたからです。また私の集めたデータと村の条件が、「わたしたちの武蔵野」と大体同じでもありました。このことから同じ関東なら、各地域の特殊性の中に一般性があることが重要です。これは更に日本全体にあてはまることでしょうし、これによって教師がそれぞれの現場で郷土を科学的に究明してこれを積重ね、おしひろげていくことによって、日本史の新たな方向が見出されるのではないのでしょうか。さらにそれは現場の教師と考古学、地学、史学等の各方面の専門家との結びつきによって、内容が豊富さを増してくるものと考えられます。²⁷

このワークブックの作成経験を通じて、相川は教師による郷土の社会科学研究の重要性を認めていく。相川は、当時武蔵野児童文化研究会が主催した「フィールド学習」にも積極的に参加し、郷土史研究の方法を学んでいた。中でもとりわけ大きな要因となったのは、考古学者である和島誠一との出会いであった。和島との出会いを通して、相川は専門的な考古学研究へと目を開かれていく。そうした経験について相川は次のように語る。

たてあな住居跡は考古学者の和島誠一さんにみていただいたが、そのとき、

「たて穴住居跡と水とは必ず関係がある。」

「台地ははじめ狩猟だけだったが、徳川期には広い部分が放牧場となり、現在は広大な畑となっている土地の生産力の発展を考えなければならぬ。しかし、だからといってすべてを土地の生産力にもっていつてはいけぬ。」

という意味のことをいわれ、わたしは「はっ」としたのだった。そして「なんというぼんくらだったろう」と思った。(中略)

つまりいろいろな知識をつかんで、それを統一的に使うという意識が欠けていたのだ。²⁸

このような専門家との交流を通して、相川は考古学の研究手法を獲得していく²⁹。当時の武蔵野児童文化研究会には、理論的指導者の桑原正雄を中心に、考古学の和島誠一、

²⁷ 前掲、相川「私の歩んだ歴史教育への道」、43頁。

²⁸ 前掲、『新しい地歴教育』、83頁。

²⁹ この点については、前掲、拙稿「相川日出雄の郷土教育実践を支えた考古学研究—『考古学と郷土教育』を手がかりに—」、90-102頁。を参照のこと。

地理学の桑野幸雄、地質学の井尻正二、歴史教育者協議会の高橋碩一などの社会科学研究の専門家たちが参加していた。そうした専門家が「フィールド学習」に関わっており、戦後の郷土教育運動の中心的役割を果たしていたのである。相川は、こうした武蔵野児童文化研究会における専門家との交流を通して、「古文書」「考古学」「庚申塔」などの郷土史研究の方法を獲得していたのであった。

(3) 生活綴方と歴史教育の結合

1952年頃、生活綴方を多少とも手がけていた教師たちの合言葉は、無着成恭の『山びこ学校』（青銅社、1950年）を乗り越えることにあった³⁰。「日本作文の会」に入りながら生活綴方の指導に頭を悩ませていた相川も、『山びこ学校』の発刊に目を開かれていたという。

わたしの教育実践も前年（1951年）の『山びこ学校』発刊に刺激され、それまで、1945年の戦後の「新教育」といわれた時の「いったいなにを教えたらよいか」「どう教えたらよいか」の長い悩みが、ここで目を開かせてもらったようなものでした。

³¹

相川は当初、生活綴方の指導に対して、「すっきりとはいきませんでした」というように、苦慮していたようであった。しかし、こうした相川を勇気づけたのが、国分一太郎との対談「生活綴方と歴史教育」（『教師の友』1952年7月号）に掲載された高橋碩一の「生活綴方と歴史教育の結合³²」ということばであったという。この高橋のことばをきっかけにして、相川の社会科授業実践上の課題も、「生活綴方と歴史教育の結合」になってい。そして、1952年4月、受け持ちの女子が、貧乏が恥ずかしいと訴えてきたことをきっかけに、ノートに「歴史を教えよ！」とメモ書きを残し³³、小学校における郷土史教育実践に手探りで取り組んでいくのである。

生活綴方と歴史教育、いいかえれば真実をリアルに具体性を持たせる綴方教育と体系的、科学である歴史教育をどう結合させるかということの問題でした。これを実現させていったプロセスのなかで、それまでまったく、わたしとしても考えてみなかった子どもの作品があらわれたのです。これは『新しい地歴教育』をお読みいただければわかりますが、「先祖のいまい」（ようていといとく）ほか一連の作品があるわけです。³⁴

³⁰ 前掲、日比「フィールド・ワークと文集による郷土史学習—相川日出雄小4『野馬のすんでいたころ』（昭27）—」、106頁。

³¹ 相川日出雄、「『新しい地歴教育』の背景」『歴史地理教育』No. 239、1975年7月、87頁。

³² 同前、同書、同頁。

³³ 相川日出雄「教師ができる実態調査—とくに郷土史について—」『教育』10号、1952年8月、79頁。

³⁴ 前掲、相川「『新しい地歴教育』の背景」、87頁。

相川の郷土史教育論は、地域の課題解決を目指す総合的な「問題解決学習」の性格をもっていたといえる。こうした相川の授業論に対して小原友行は、「問題解決」を方法原理とする「研究問題解決学習」の社会科授業論の一つの到達点であるとして高く評価している³⁵。

5. 第四期 多様な教育実践の追求 (1954-1958年)

(1) 社会科実践の継承の問題

相川は、教育研究においても研究的姿勢を絶やすことの無い教師であった。相川は、実践記録『新しい地歴教育』に関して次のように語る。

子どもたちの生活や考え方と教師の思想や能力は相互に反映しあっていくのも事実である。わたくし自身、この一年間をふりかえってみて、驚くほどの変化と前進をしているのを感じている。そして、この教師の自己改造と無関係に子どもたちは変化しているのではない。この前例がしめした子どもたちの前進は、この教師の自己改造とどのように関係し、成し遂げられていったかという過程を、学習や子どもの作品を通して、順を追って書いていこうと思う。³⁶

このように、相川は『新しい地歴教育』の実践を通じて、教師としての「自己改造」を行っていたのである。しかし当時は、相川の『新しい地歴教育』の実践記録に対して、さまざまな評価が提出されていた。具体例を挙げれば、「相川先生だから、相川先生の学校(分校)だからこんなに素晴らしいことができる」「まるで神わざか何かのような錯覚をおこすのです。『とてもじゃないけれど、手がとどかない』³⁷」などといったものであった。そうした中、大田堯は相川実践に対して、「こういう実践がとられたのは、やはりこの記録がとられたときの運動の段階を示していると考えます³⁸」というように、一定の評価を与えている。このように相川による実践記録『新しい地歴教育』を、「指導の事実」として理解するか、「読み物」としてとらえるかについては意見の分かれたところであった。こうした教育実践の継承の難しさについては、相川自身も次のように理解するところでもあった。

³⁵ 小原友行「農村青年教師による初期社会科教育実践の授業論—相川・江口・鈴木実践の分析」『教育方法学研究』No. 21、1995年、146頁。

³⁶ 前掲、相川『新しい地歴教育』、15-16頁。

³⁷ 川崎新三郎「相川日出雄著『新しい地歴教育』の検討」、川崎市立渡田小学校有志「読書会にて『新しい地歴教育』の検討」（ともに『歴史地理教育』No. 5、1954年11月、53-55頁）。一方で、湯山厚のように相川の実践を受け継ごうとする教師も存在していた（湯山厚「先人に学ぶということ—相川日出雄氏から」『歴史評論』No. 47、1953年7・8月、65-69頁）。

³⁸ 大田堯「戦後の教育実践を検討する(下)」『教育』No. 65、1956年10月、17頁。

この本によって、職人的な一人仕事から多くの人々の批判的検討が行われ、日本の教育を万分の一でも前進させることができるものであるなら、日本の子どもたちのためにも、また命をすりへらすようなこの教育という仕事のためにも幸福なことですし、また私はそれを願ってやまない次第です。³⁹

このように、相川は『新しい地歴教育』実践を完成したものと位置づけておらず、継承されていくべきものとして捉えていたのである。

(2) 本校への転勤と文学教育の追求

相川は、1955年度に富里小学校久能分校から富里小学校本校への転勤を経験する。この本校への転勤を通して相川の社会科授業観や授業実践は変容していくことになる。1955年度の一年間を振り返って、相川は次のように語る。

わたしが、本校へ来て受け持ったのは6年生だった。もともと、この6年という学年を受持つについても、それ相当のわけがあった。わたしが分校から本校へ来るについて、職員の間でも、「彼は何年を受持つであろうか。」ということは大きな関心事であった。といっても13学級、16人の教師のうち、校長、事務職員、女の先生方9人以外の男の教師たちである。「最高学年を受持つのは優秀な教師である」という堅い信念を持った教師には、わたしが6年を受け持つことは、わたしに「点数をかせがれる」恐れがあったから…。「分校で4年ばかり持っていたから、6年は無理だろう。」と教頭に言われたり、「最高学年を1カ年じゃ無理だ」とか、へりくつをならべられたので、こうなってはわたしも意地になってしまい、「校長さんは君の好きな学年でよいといったから…。」と強引に6年を受持ったのだ。

ところが、それがエライ子ども達だった。

一年坊主とまるで変りがない。どんなに面白くやっても十分と続かない。そろばんをいたずらするもの、消しゴムをナイフでせっせときざんでままごとをするもの、ノートへ女子は一心にぬり絵式のおねえさんをかき出す、いやはや、もうてんやわんやで一週間目には声がつぶれてしまう始末で、「これじゃ、ムキになって6年を受持つのでなかった。」と心ひそかに悲鳴をあげるようになってしまった。(後略)⁴⁰

このように相川は、本校勤務を通して同僚関係や子どもとの関係に苦悩や葛藤した経験を語る。そして、この頃より相川は文学教育に関する主張を重点的に行っていくこととなる。1950年代後半において発表された相川の論考が、文学教育に関するものが多いことも、そうした事実を物語っている。このような教育実践をめぐる苦悩と葛藤の経験は、相川の社会科授業観や授業実践の変容をもたらすことにもなった。相川は歴史教育に関して次のように語る。

³⁹ 前掲、相川『新しい地歴教育』、2頁。

⁴⁰ 相川日出雄「国語教師の仕事」『教師の友』No. 42、1955年6月、8頁。

子どもたちはこの劇で過去をさらに身近かに感じたようです。ごろ吉とおたんが実在の人かのように、そして泉が湧くような愛情をさえ、ごろ吉、おたんに注いだようです。

それは祖先への愛情であり、郷土への愛でもあると思います。さらにこの土台に立ってこそ前方を見つめる子どもができるのではないかと私は考えています。そうでなければゴーストのような、科学を空想に役立てたり、未来について考える子どもに教えることはできないでしょう。それには歴史教育（創作活動も含めての）だけでなく、自然科学も必要とすることは、勿論のことですが…。

ですから結論としては、われわれの全面に社会科学、自然科学による教育と文学教育が日程にのぼられることになってくると思います。そしてこの全体の中ではっきりと歴史教育の位置や比重というものを検討すべきです。⁴¹

この頃の相川の教育観には「祖先への愛情」「郷土への愛」といったある意味「科学」とは反するものが登場してきている。これは相川における文学教育の追求から来していたものであった。この頃の相川は、小学校教師として多様な教育実践を追求する立場から文学教育に力を注いでいたのである。

6. 第五期 社会科教師、郷土史家として（1959-1977年）

(1) 郷土史研究への没頭

富里小学校本校に勤務して二年目の1955年度から三年間、相川は持病の結核がもって休職をすることになる。復職後、相川は千葉県四街道町立旭小学校転任して5年生を受け持つ。そして、1958年2月に受け持ちの児童が工事現場から弥生土器を見つけ、相川へ報告したことがきっかけとなり、弥生時代の集落跡である山梨向井遺跡を発見する。当時の新聞はこの出来事を、「住居跡13か所も発見」「千葉県（四街道）に古代文化の宝庫」と大々的に報じた⁴²。さらに4月には持ち上がりの6年生の児童がその住居跡から500mほど離れた場所に、山梨向井前広貝塚を発見する。この出来事についても当時の新聞は、「古墳と六十二の瞳」「四街道町旭小のヨイ子が住居跡を発見」「登呂遺跡に次ぐ立派さ」「専門家も舌をまく」「いながらの社会科」と折紙と大々的に報じることとなる⁴³。これらの印象的な出来事がきっかけとなり、相川は郷土史研究にのめりこんでいくこととなる。

そして、1950年代後半以降相川は、小学校において社会科の教育実践を積み重ねていくと同時に、郷土クラブを組織し、地域の埋蔵文化財の調査研究に積極的に関わっていくことになる。相川の調査ノートには、そうした郷土クラブの活動記録が多数残されて

⁴¹ 相川日出雄「ごろ吉、おたんものがたりについて」『新しい歴史教育』No. 4、1954年6月、59頁。

⁴² 『読売新聞』1958年3月16日付。

⁴³ 『東京タイムズ 千葉県版』1958年4月6日付。

いる⁴⁴。そして、その後のライフヒストリーにおいて相川は、郷土史家としてのアイデンティティを強くもっていくことになる。

(2) 郷土史家として

相川の郷土史家としての歩みは、その後の小学校教師生活においても貫かれていくこととなる⁴⁵。専門書や雑誌『歴史地理教育』に地域での社会科学研究的成果を寄稿し、郷土史研究だけでなく、普及・啓発活動も積極的に行っていた⁴⁶。また、退職前三年間は千葉県歴史教育者協議会の副会長も務め、後進の社会科教師たちの指導・助言をする役割も担っていた。千葉県歴教協において「地域に根ざす」教育が盛り上がってきたことや、「フィールドワーク」といったことばが定着し、継承されていたこと⁴⁷は、相川実践を継承したものとして位置づけられるだろう。相川は、退職後に刊行した『地区探訪』の中の著者紹介の項目において、自己の郷土史家としての来歴について次のように語っている。

昭和33年旭小学校勤務の当時、山梨向井で弥生遺跡を発見した時のことです。道路沿いにたて穴住居の断面が十数戸露出しているのを目のあたりにした時はほんとうに息がつまるほど驚きました。(中略)

また物井地区野北ノ作の荻原保さん方で中世城郭を調査し、室町時代の和鏡を見つけた時も腰の抜けるほどたまげました。このように腰の抜けるほどたまげることが四街道町の文化財審議委員のしごとをしていますとなん年かには一回はあります。もう文化財の仕事を担当ではじめて21年間もたってしまいました。歴史の流れからみればあつという間のできごとです。⁴⁸

ここでは、教職時代、山梨向井遺跡の発見と中世城郭調査の経験が郷土史家としての「転機」となったことが語られている。後に相川と共に『地区探訪』の編集を担った伊藤勇司は、「先生の生涯は一生勉強だったと思う⁴⁹」と表現している。このことばは、相川のライフヒストリーに一貫して存在していた社会科学的研究への情熱と、小学校社会科教師として専門性を常に更新していこうとする姿勢を、的確に捉えていると思われる。

おわりに

本研究では、小学校社会科教師としての専門性形成の問題について、戦後社会科教育

⁴⁴ 2009年11月11日、四街道市史編さん室にて確認した。

⁴⁵ 四街道市文化財審議会編『四街道の文化財』第19号(故 相川日出雄氏追悼号、四街道市教育委員会、1996年、2-11頁)に詳しい。

⁴⁶ 稿末の「相川日出雄全執筆リスト」を参照。

⁴⁷ 相川日出雄の「<座談会>『あかるい社会』の継承と発展—徳武敏夫氏の新著をめぐって—」(『歴史地理教育』No.220、1974年1月)における発言(40-41頁)より。

⁴⁸ 相川日出雄『地区探訪』四街道市役所、1983年、120頁。

⁴⁹ 前掲書、『四街道の文化財—故 相川日出雄氏追悼号—』第19号、50頁。

実践史を代表する相川日出雄のライフヒストリーに着目して考察を行ってきた。研究成果は以下の三点にまとめることができる。

第一に、相川の小学校社会科教師としての専門性形成には、社会科学的研究の経験が重要な意義をもっていたことを確認することができた。それは、相川が社会科学的研究の研究方法を社会科授業に活用していたところに求められる。さらに相川は、授業研究にも絶えず取り組む教師であった。子どもたちが生活で直面する問題を学習課題として取り上げ、生活綴方的教育方法や郷土教育的教育方法を積極的に社会科授業に取り入れていたことなどにも、そのことを確認できる。こうした相川の研究的姿勢は、教師の専門性形成の上で欠かせないものであった。すなわち、相川のライフヒストリーの事例では、小学校社会科教師としての専門性が、社会科学的研究や教育研究の進展とともに、深化していたといえよう。

第二に、相川のライフヒストリー上での専門性形成の「転機」となった経験が、地域住民との連携、学校内外における研究、教育実践上の課題の自覚化、仕事上の経験、調査研究活動の経験、教育界の動向など、複数の要因によって達成されていた。つまり、相川の場合、小学校社会科教師としての形成の「転機」となった経験は、様々な人とのかかわり合いの中で生じていたのである。また、そうした相川の「転機」となった経験が、成功や獲得体験としてだけでなく、葛藤や苦悩の体験など、さまざまな様式として語られていたことも明らかになる。このことから、相川の事例では、小学校社会科教師としての専門性形成が、単線的に行われたものでなかったことが示される。

第三に、相川のライフヒストリーの事例からは、専門性形成における教師の主体性の問題が提出できる。相川の場合、実践記録の記述を通して、自らの教育実践上の課題の自覚化が行われていた。つまり、1950年代前半において相川は、主体的に小学校社会科教師としての専門性形成を行っていたのである。しかし、1950年代後半以降、相川による実践記録を通した語りは、量的に減少していく。背景としては、1950年代における実践記録への意識の変容があったと考えられる。こうした相川の事例からは、1950年代における小学校社会科教師の意識の変容の実態について、今後も歴史的に検討すべき課題が提出される。

【謝 辞】

相川日出雄に関する聞き取り調査及び調査ノートの閲覧に関しては、四街道市史編さん室の川端弘士氏、斉藤毅氏からご協力を頂いた。また、資料収集に際し、富里市教育委員会の吉林昌寿氏にご協力いただいた。御名前を記して感謝に代えたい。

「資料：相川日出雄全執筆リスト」

凡例：『町政だより』は、四街道町役場編集、発行。『市政だより』は、四街道市役所編集、発行。『四街道市の文化財』は、四街道市文化財審議会編集、四街道市教育委員会発行。『四街道の文化財』第19号（故 相川日出雄氏追悼号、1996年、39-48頁）を参考にして作成した。

1951年

「地力等級と取組む キン青年奮闘記」『農村文化』No. 52、1951年4月号。

「家貧しければ」後藤彦十郎編『魂あいふれて—二十四人の教師の記録—』百合出版、1951年10月。

1952年

「私の歩んだ歴史教育への道」『歴史評論』No. 35、1952年4月。

「郷土から学ぶ教育の実践」『教師の友』第3巻6号、1952年7月。

「教師ができる実態調査—とくに郷土史について—」『教育』10号、1952年8月。

1953年

「農村生活と歴史教育」歴史教育者協議会編『平和と愛国の歴史教育—1952年度歴史教育年報—』東洋書館、1953年1月。

「霜降る夜の母子の話—古川先生の質問に答えて—」『教育』No. 15、1953年1月。

「社会科と郷土教育」宮原誠一編『日本の社会科』国土社、1953年10月。

1954年

「ごろ吉、おたんものがたりについて」『新しい歴史教育』No. 4、1954年6月。

『新しい地歴教育』国土社、1954年7月。

1955年

「考古学と郷土教育 小学校の部」和島誠一編『日本考古学講座』第一巻、河出書房、1955年1月。

「依田氏への疑問—指導実践記録・社会科はかくて生きる」『教師の友』No. 38、1955年2月。

「国語教師の仕事」『教師の友』No. 42、1955年6月。

1957年

『やづの子ども—心を養い育てる指導記録—』三一書房、1957年2月。

1960年

「算数の問題と子どもたち」『月間教師生活』No. 9、1960年3月号

「やづの子ども」勝田守一他編『戦後教員物語（II）』三一書房、1960年6月。

1962年

「古文書と歴史教育 実践例（小学校）」高橋碩一編『古文書入門』河出書房新社、1962年4月。

「四街道町及び周辺地域石器時代遺跡調査」『四街道町内遺跡地区』四街道町教育委員会、1962年。

1963年

「旭小学校5年文集『らっかしょうの子ども』から」『母と子』第8巻5号、1962年5月。

1964年

「子どもの文化の変化」『千葉教育』No. 193、1964年12月。

1965年

『作文と教育』1965年7月臨時増刊号、編集協力。

1969年

「日本史・実践の整理 4 江戸時代(幕藩体制)」『歴史地理教育』No. 157、1969年7月。

1970年

「小集団学習と学習課題への疑問の出させ方」『教育科学社会科教育』No.75、1970年11月。

1971年

「四街道町中世城砦跡調査報告」『四街道町中世城砦跡調査報告』千葉県教育委員会、1971年。

1974年

「<座談会>『あかるい社会』の継承と発展-徳武敏夫氏の新著をめぐって-」『歴史地理教育』No. 220、

1974年1月。

「四街道の中世遺跡」『四街道の文化財』第1号、1974年3月。

『学び生きるよろこびを』明治図書、1974年。

『わたしたちの四街道町』1974年4月、編集者。

1975年

「千葉県大宮町坂尾のフィールドワーク」『歴史地理教育』No. 236、1975年4月。

「町内の遺跡 亀崎、米山遺跡」『四街道町の文化財』第2号、1975年6月。

『新しい地歴教育』の背景」『歴史地理教育』No. 239、1975年7月。

「北総の中世遺跡」『房総の民衆の歴史と現実』千葉県歴史教育者協議会、1975年7月。

「中世へのいざない-地域に根ざした授業づくりのために-」『房総の民衆の歴史と現実』千葉県歴史教育者協議会、1975年7月。

1976年

「町内の石仏・石造物」『四街道町の文化財』第3号、1976年4月。

1977年

「地区探訪・吉岡地区-古い伝統と歴史を今なお残す-」『町政だより』1977年10月号。

「地区探訪・旭ヶ丘地区-山林と畑の地を造成してはや10年-」『町政だより』1977年11月号。

「地区探訪・内黒田地区-明治のはじめ44戸の農村-」『町政だより』1977年12月号。

1978年

「地区探訪・山梨地区-千里の里 山梨-」『町政だより』1978年2月号。

「地区探訪・鹿放ヶ丘地区-一面の原野も今は宝の農地-」『町政だより』1978年3月号。

「地区探訪・和良比地区-宅地造成と隣り合わせ-」『町政だより』1978年4月号。

「地区探訪・長岡地区-伝統を引き継ぎ文化財の宝庫に-」『町政だより』1978年5月号。

「地区探訪・小名木地区-小名木の『木』は『城』の意か-」『町政だより』1978年6月号。

- 「地区探訪・栗山地区-古村から軍都そして住宅地に…」『町政だより』1978年7月号。
- 「地区探訪・上野地区-妙見様が産土神の村…」『町政だより』1978年8月号。
- 「地区探訪・物井地区-物井とともに歩んだ四街道-」『町政だより』1978年9月号。
- 「地区探訪・亀崎地区-米作りに影響を与えた日光水-」『町政だより』1978年10月号。
- 「地区探訪・鹿渡地区-興味ある名の由来と集落の面影-」『町政だより』1978年11月号。
- 「地区探訪・成台中地区-集団信仰と石塔群-」『町政だより』1978年12月号。

1979年

- 「地区探訪・大日地区-開拓地・住宅地とかけ足の変遷-」『町政だより』1979年1月号。
- 「地区探訪・下志津新田地区-演習場拡大による村ぐるみの大移動-」『町政だより』1979年2月号。
- 「地区探訪・南波佐地区-語感から経済交流は千葉市か-」『町政だより』1979年3月号。
- 「地区探訪・吉岡地区吉岡新開-歴史の足跡残す御成街道-」『町政だより』1979年4月号。
- 「地区探訪・萱橋地区-戦に泣かされた農家-」『町政だより』1979年5月号。
- 「地区探訪・栗山地区馬洗-佐倉から千葉へ抜ける街道 馬も人もここ-」『町政だより』1979年6月号。
- 「地区探訪・山梨地区向井-縄文時代からの生活の場-」『町政だより』1979年7月号。
- 「地区探訪・山梨地区川戸-今も続く六夜様-」『町政だより』1979年8月号。
- 「中世へのいざない-千葉県四街道町の古屋城跡発掘-」『歴史地理教育』No. 295、1979年9月。
- 「地区探訪・吉岡地区-町名地名考 その1-」『町政だより』1979年9月号。
- 「地区探訪・吉岡地区-町名地名考 その2-」『町政だより』1979年10月号。
- 「地区探訪・吉岡地区-町名地名考 その3-」『町政だより』1979年11月号。
- 「地区探訪・山梨地区宿-今も残る旅籠-」『町政だより』1979年12月号。

1980年

- 「地区探訪・四街道地区-昔十三人衆の畔田新田-」『町政だより』1980年1月号。
- 「地区探訪・四街道地区-夫婦坂輪廻の絆-」『町政だより』1980年3月号。
- 「地区探訪・四街道地区-軍隊の町、首都圏都市に蘇る-」『町政だより』1980年4月号。
- 「地区探訪・和田地区-さざなみの志賀の大わた淀むとも…」『町政だより』1980年5月号。
- 「地区探訪・内黒田地区-百姓大迷惑の合戦-」『町政だより』1980年6月号。
- 「地区探訪・長岡地区-十九たちまち二十日宵闇-」『町政だより』1980年7月号。
- 「地区探訪・長岡地区-御酒頂戴被仰付莫加至極難有仕合奉存候-」『町政だより』1980年8月号。
- 「地区探訪・亀崎地区-チャンカラカン、チャンカラカンと機織って…」『町政だより』1980年9月号。
- 「地区探訪・栗山地区-三百十六年の伝統、男の出羽三山参り-」『町政だより』1980年10月号。
- 「地区探訪・山梨地区川戸-妙見の祭礼とて、三百疋の早馬を見物-」『町政だより』1980年11月号。
- 「地区探訪・庚申塔特集-三百年続く庚申信仰-」『町政だより』1980年12月号。

1981年

- 「地区探訪・地名・珍名・奇名づくし①」『町政だより』1981年1月号。
- 「地区探訪・鹿放ヶ丘地区-下志津原ニ於テ 大砲射的演習候ニ付…」『町政だより』1981年2月号。
- 「地区探訪・鹿放ヶ丘地区-つわものどもが夢のあと-」『町政だより』1981年3月号。
- 「地区探訪・鹿放ヶ丘地区-不毛の原野 八億八千万円の宝の土地に-」『市政だより』1981年4月号。
- 「地区探訪・長岡地区-千三百年前の火事、ボッカ山遺跡-」『市政だより』1981年5月号。
- 「地区探訪・長岡地区-千三百年前の火事、続ボッカ山遺跡-」『市政だより』1981年6月号。
- 「地区探訪・長岡地区-赤いたすきを先に立て ウエテシャレ、ウエテシャレ-」『市政だより』1981年7月号。
- 「第5章 近世 第11節 宗教」富里村史編さん委員会編『富里村史 通史編』富里村、1981年7月。
- 「第6章 近・現代 第6節 教育」富里村史編さん委員会編『富里村史 通史編』富里村、1981年7月。
- 「第6章 近・現代 第10節 兵事」富里村史編さん委員会編『富里村史 通史編』富里村、1981年7月。

「地区探訪・吉岡地区-霜ばしら氷のはりに雪のけた…-」『市政だより』1981年8月号。
「地区探訪・物井地区-御山繁盛記-」『市政だより』1981年4月号『市政だより』1981年9月号。
「地区探訪・成台中地区-百万遍・ナイダナイダ、ソーレハナイダ-」『市政だより』1981年10月号。
「地区探訪・長岡地区-古文書拝見、霜月中急度可令皆納者也-」『市政だより』1981年11月号。
「地区探訪・市内歴史地区」『市政だより』1981年12月号。

1982年

「地区探訪・地名・珍名・奇名づくし②」『市政だより』1982年1月号。
「地区探訪・山梨地区-鷲棲山大隆寺-」『市政だより』1982年2月号。
「地区探訪・長岡地区-読みも読んだり百巻の書籍-」『市政だより』1982年4月号。
「地区探訪・亀崎地区-農民と共に三百年-」『市政だより』1982年5月号。
「地区探訪・鹿渡地区-ししわたし村・農民と城-」『市政だより』1982年6月号。
「地区探訪・栗山地区-再見吧！祖国啊・我的母親！-」『市政だより』1982年7月号。
「地区探訪・長岡地区-まぼろしの寺正福寺-」『市政だより』1982年8月号。
「地区探訪・吉岡地区-精霊、家々に還る日-」『市政だより』1982年9月号。
「地区探訪・道標石塔特集」『市政だより』1982年10月号。
「地区探訪・成台中地区-市内神社詣で成山の高麗神社-」『市政だより』1982年11月号。
「地区探訪・山梨地区-一切如来心秘密 全身舍利真言陀羅尼経-」『市政だより』1982年12月号。

1983年

「地区探訪・亀崎地区-神社初詣で亀崎熊野神社-」『市政だより』1983年1月号。
『地区探訪』四街道市役所、1983年3月。
「地区探訪・亀崎地区-井伊掃部頭様に水戸様御家来及乱妨-」『市政だより』1983年6月号。
「地区探訪・物井地区-村方必死と困窮相募り難渋至極-」『市政だより』1983年8月号。
「地区探訪・長岡地区-地藏堂通夜物語-」『市政だより』1983年9月号。
「地区探訪・物井地区-隠岐国物井から下総国物井へ-」『市政だより』1983年11月号。
「地区探訪・物井地区-河内国若江郡高井田村長栄寺と下総国印旛郡物井村円福寺-」『市政だより』1983年12月号。

1984年

「地区探訪・亀崎地区-ぼんでんと出羽三山参り-」『市政だより』1984年1月号。
「地区探訪・亀崎地区-長州藩土桂小五郎佐倉へ-」『市政だより』1984年2月号。
「地区探訪・亀崎地区-踊念仏の伝統・亀崎の天道念仏-」『市政だより』1984年3月号。
「市内の石造物・庚申塔の部」『四街道市の文化財』第10号、1984年3月。
「地区探訪・上野地区-天保の飢饉・春三月中より西方の風吹き-」『市政だより』1984年4月号。
「地区探訪・上野地区-消えた地名馬堤・田苗尻-」『市政だより』1984年5月号。
「地区探訪・物井地区-近郷に82村600人集まる-」『市政だより』1984年6月号。
「地区探訪・栗山地区-昔30戸、今2、148世帯-」『市政だより』1984年7月号。
「地区探訪・吉岡・軽戸地区-空一面花火と見まごう焼夷弾-」『市政だより』1984年8月号。
「地区探訪・和良比中山遺跡」『市政だより』1984年10月号。
「地区探訪・物井地区-坂東太郎大暴れ-」1984年11月号。
「地区探訪・物井地区-当山奔走する医師松本春亭-」『市政だより』1984年12月号。

1985年

「地区探訪・内黒田地区-内黒田地名考と集落の始まり-」『市政だより』1985年1月号。
「地区探訪・亀崎地区-おびしや-」『市政だより』1985年2月号。
「地区探訪・吉岡地区-ナンジャモンジャのどうろくじん-」『市政だより』1985年3月号。

「長栄寺弟子儀正尼の事-物井地区桜井靖彦家文書による-」『四街道市の文化財』第11号、1985年3月。
「地区探訪・物井地区-天狗等筑波山に拳兵-」『市政だより』1985年4月号。
「地区探訪・四街道地区-春日神社村ぐるみの変遷-」『市政だより』1985年6月号。
「地区探訪・四街道地区-縄文時代の四街道の人口-」『市政だより』1985年7月号。
「地区探訪・四街道地区-縄文時代の四街道の人口 その2-」『市政だより』1985年8月号。
「地区探訪・物井地区-けら・いなご・赤蛙取り人足-」『市政だより』1985年9月号。
「地区探訪・和良比地区-天保サラリーマン伝-」『市政だより』1985年10月号。
「地区探訪・四街道地区-此度神奈川表江英国艦数艘渡来-」1985年11月号。
「地区探訪・亀崎・物井・長岡・山梨地区-御変革につき左の村々助郷申付-」『市政だより』1985年12月号。

1986年

「地区探訪・下志津新田-親子三代 天保サラリーマン伝-」『市政だより』1986年1月号。
「地区探訪・百二十三年前にあった種痘」『市政だより』1986年2月号。
「地区探訪・和良比地区-どろんこまつり-」『市政だより』1986年3月号。
「近世農民の現当二世信仰」『四街道市の文化財』第12号、1986年3月。
「地区探訪・吉岡地区-中世末自分たちの手で創建された吉岡春日神社-」『市政だより』1986年5月号。
「地区探訪・鹿放ヶ丘地区-四〇年の歳月が原野を変えた-」『市政だより』1986年6月号。
「地区探訪・四街道地区-八百稲荷さま演習場からお引越し-」『市政だより』1986年7月号。
「地区探訪・物井地区-弥五兵衛・徳治郎の運命-」『市政だより』1986年8月号。
「地区探訪・大日地区-開拓41年辛苦の農業実る-」『市政だより』1986年10月号。
「地区探訪・亀崎地区-実りの秋、収穫そしてお祭-」1986年10月号。
「地区探訪・下総国印旛郡山梨村の話その1-幻の寺、常福寺・太照院・泉蔵院・不動院-」『市政だより』1986年11月号。
「地区探訪・下総国印旛郡山梨村の話その2-幻の寺、常福寺・太照院・泉蔵院・不動院-」『市政だより』1986年12月号。

1987年

「地区探訪・下総国印旛郡山梨村の話その3-さなか街道をお馬が通る-」『市政だより』1987年1月号。
「地区探訪・下総国印旛郡内黒田村の話-人口、いま690人121年前210人-」『市政だより』1987年2月号。
「地区探訪・四街道地区-『四街道』地名発祥の地に当時の道標復元成る！」『市政だより』1987年3月号。
「物井・桜井家近世文書伐取願書について-とくに文化・文政期における諸問題-」『四街道市の文化財』第13号、1986年3月。
「地区探訪・物井地区-寒川御蔵への年貢道」『市政だより』1987年7月号。
「地区探訪・旧千代田村-寒川御蔵へ、寒川御蔵への年貢街道-」『市政だより』1987年9月号。
「地区探訪・馬頭観音特集その1」『市政だより』1987年9月号。
「地区探訪・亀崎地区-江戸時代の年貢米の話-」『市政だより』1987年10月号。
「地区探訪・馬頭観音特集その2」『市政だより』1987年11月号。
「地区探訪・突きつけられた連判状-佐倉藩領2カ町85カ村の名主大奮発！」『市政だより』1987年12月号。

1988年

「地区探訪・市内文化財紹介」『市政だより』1988年1月号。
「地区探訪・全域-おびしや・百万遍・はだかまいり…-」『市政だより』1988年2月号。
「地区探訪・物井地区-小山藤右衛門日露戦争に従軍する-」『市政だより』1988年3月号。

「馬頭観音・市内所在近世造立の石塔についての一考察」『四街道市の文化財』第14号、1988年3月。
「地区探訪・物井地区-猪鹿多く殊の外 作をあらし迷惑仕り候-」『市政だより』1988年4月号。
「地区探訪・大日地区-銃声と共に原野に散った若い命-」『市政だより』1988年5月号。
「地区探訪・大日地区-市内最高地点は大砲の標的-」『市政だより』1988年6月号。
「地区探訪・大日地区-当今、容易ならざる時節に相成り候-」『市政だより』1988年7月号。
「地区探訪・大日地区-昔、軍事基地・今、核兵器廃絶平和都市-」『市政だより』1988年9月号。
「地区探訪・栗山地区-草蒸す、かまね幾星霜-」『市政だより』1988年11月号。

1989年

「地区探訪・市内文化財紹介」『市政だより』1989年1月号。
「地区探訪・上野地区-総合公園用地に平安時代の住居址-」『市政だより』1989年2月号。
「物井不動堂の来しかた行くすえ」『四街道市の文化財』第15号、1989年3月。
「地区探訪・物井地区-物井村に六孫王神社（京都）修復の寄進-」『市政だより』1989年4月号。
「地区探訪・旧千代田村-秩父参りの話-」『市政だより』1989年11月号。
「地区探訪・市内全域-秩父観音札所第23番寺詠歌-」『市政だより』1989年12月号。

1990年

「地区探訪・和良比地区-永和五蔵大才己未、仲春時正-」『市政だより』1990年5月号。
四街道市史編纂委員会『四街道市史 近世編 資料集』四街道市、1990年5月。
「地区探訪・和良比地区-此頃都ニハヤルモノ 夜討、強盗、謀論旨-」『市政だより』1990年6月号。
「地区探訪・和良比地区-(キャ、カ、ラ、バ、ア)-」『市政だより』1990年7月号。
「地区探訪・和良比地区-生きて領地を得る者あり 死して板碑に名を残す者あり -」『市政だより』1990年7月号。
「地区探訪・南波左間地区-九百年前の渡来銭出土-」『市政だより』1990年11月号。

1991年

「地区探訪・南波左間地区 その2-渡来銭の村 景德鎮ともつながっていた-」『市政だより』1991年1月号。
「地区探訪・南波左間地区 その3-しょんずい五郎太夫、中国に渡る-」『市政だより』1991年2月号。
「地区探訪・物井地区-南蛮渡来のタバコそして火打石-」『市政だより』1991年3月号。
「南波左間、寺屋敷遺跡についての考察-とくに中世以降の諸問題について-」『四街道市の文化財』第17号、1991年3月。
「地区探訪・物井地区-鎌倉・南北朝と生き抜いた人々-」『市政だより』1991年5月号。
「地区探訪・吉岡地区-千葉貞胤と花山院藤原師賢-」『市政だより』1991年6月号。
「地区探訪・物井地区-六日七日八日の灰砂ニテ村中一同難儀-」『市政だより』1991年7月号。
「地区探訪・物井地区-再び46年目の8月15日」『市政だより』1991年8月号。